

擬似ヒルステーションの概念規定と国民化の様態

A Definition of “Quasi-Hill Station” and its Naturalization

稲垣 勉*

INAGAKI, Tsutomu

Abstract: Among various upland resorts, hill stations are characterized by its colonial origin and utilizing climate of high altitude. In consequence of colonial origin, hill stations have a westernized landscape. However other than colonial hill stations, there are upland resorts that are noted for westernized landscape. Some of them were established after the end of colonial rule. Genting Highland (Malaysia) or Kirirom (Cambodia) will be typical examples of this kind of marginal upland resorts. This article will clarify its nature through attempt to define those upland resorts as “quasi hill stations”.

Key words: ヒルステーション (hill stations), 擬似ヒルステーション (quasi hill stations), 高原保養地 (upland resorts), 植民地主義 (colonialism), ポストコロニアリズム (post-colonialism), ゲンティンハイランド (Genting Highland), 廬山 (Lushan), キリロム (Kirirom), パーイ (Pai)

- I はじめに
- II ポストコロニアル状況下での高原保養地建設
- III 主権国家における高原保養地の誕生
- IV 擬似ヒルステーションの概念規定
- V 擬似ヒルステーションの国民化
- VI ヒルステーション概念の再検討

をヒルステーションの範疇とするかについての議論は、かならずしも確定していない(稲垣, 2009)。本稿ではヒルステーションに類縁性をもつ高原保養地を、白坂(2009)の所説を拡張することで、擬似ヒルステーションという範疇として明確することを目的している。これはイメージ上の接続をもとに、ヒルステーションを概念的に拡張することを目的とした議論ではない。むしろヒルステーションと類縁部分とのあいだに明確な境界を設けることで、錯綜しているヒルステーションの議論を整理するための視座を確保すること、さらにはそれを通じてヒルステーションに固有の位相を明らかにすることを目的としている。

さらに本稿では擬似ヒルステーション、ことに第2次大戦後、途上国の経済発展にともなって発生した新しい高原保養地における国民化の過程に

I はじめに

高原保養地には様々な類型が存在しており、発生の経緯、発展過程、あるいは社会的な位置づけや機能も多様である。ヒルステーションは高原保養地の源流のひとつとはいえ、その一類型にすぎない。しかしヒルステーションとそれに近接した性格を持つ高原保養地は数多く、同時にどこまで

*立教大学観光学部・教授

ついて検討する。植民地主義下に建設されたヒルステーションのほとんどは、植民地主義の終焉、新興国民国家の成立にともなって、国民化の過程に置かれることとなった。一方擬似ヒルステーションも別の文脈のもと国民化の過程を経験する。本稿では両者の国民化過程を比較し、ヒルステーションにおける植民地主義の影響と、それがいかにポストコロニアル状況に受け継がれていくかについての明確化を試みる。同時にヒルステーションの持つイメージが擬似ヒルステーションという周縁的な形態を通じて、グローバル化する観光状況にいかに関わりついていくかについての理解を得たいと考えている。

II ポストコロニアル状況下での高原保養地建設

Reed はヒルステーションの成立を植民地主義下の軍事的、戦略的重要性に求め、その後の発展過程における普遍的な傾向として、同様に植民地化主義下における健康・保健上、余暇に果した役割を指摘する。しかしヒルステーションの根源

が植民地主義に基づくという理解にたちながらも、Reed は植民地主義が終焉した後、1969年から開発が始まったGenting Highland (マレーシア)をヒルステーションの範疇と見なしている(Reed, 1979)。Reed がGenting Highlandをヒルステーションとみなす根拠はかならずしも明確ではない。Reed (1979)において、建設者が植民地駐留軍、植民者ではなく、建設目的もカジノを含むレクリエーション開発による国際収支の改善であると指摘しながら、Genting Highlandは先験的にヒルステーションとして扱われており、ポストコロニアル状況下におけるヒルステーションの創出として結論づけられている。Reed はヒルステーションを規定する要素として、建設者、建設目的ではなく、むしろヒルステーションとされる高原保養地の社会的機能を重視している。くわえてさらに重要なのは、植民地主義—ポストコロニアリズムという文脈のもとに発生したか否かという点であるとみなしていると考えて良からう。

Reed はGenting Highlandをまれな例外として位置づけているが、この見解には限定を加える必要がある。Robinson が指摘するKirirom (Tiou-

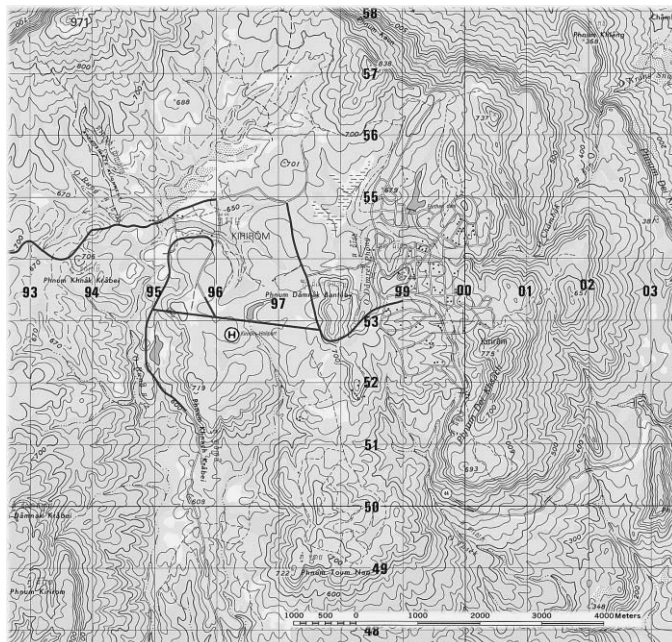


図1 Kirirom 中心部
資料：The Defense Mapping Agency (USA)

longville¹⁾, カンボジア) もまた同様のポストコロニアル状況下で生まれた高原保養地である (Robinson, 1972). 1960年の計画策定 (Grant Ross and Collins, 2006), 1962年の建設開始から²⁾ 1970年の親米クーデタ, それに続く南ベトナム軍の侵攻によって破壊が始まり放棄されるまでの10年足らずの間, Kiriromには公務員を対象にした休暇用宿舎, 国立銀行の職員のための休暇用宿舎, 外国公賓用宿舎, シハヌーク元首 (当時) のためのシャレーなどが次々と建設され, 避暑地としてばかりでなく首脳外交の場としても用いられた. この時点で個人所有の別荘だけでも136棟に達したといわれる (Grant Ross and Collins, 2006).

Kiriromの建設が, 1917年からフランスによって開発が始まったカンボジア南部のヒルステーション (Mogenet, 2003), Bokorの再整備計画と並行的に進められたことは注目に値する. カジノなどを含むBokorの再整備計画が, 外国人を含む需要層を対象とした従来型ヒルステーションのポストコロニアル状況下における再生であったとするなら, Kiriromはシハヌークをはじめとする推進者達や潜在的な利用者によって, 人民社会主義共同体 (Sangkum Reastr Niyum) 統治下におけるカンボジアエリート層を対象とする新興国民国家自体によるヒルステーションの建設として意識されていたとしても不思議ではない³⁾.

Ⅲ 主権国家における高原保養地の誕生

一方ヒルステーション類縁の高原保養地は, 前述のGenting Highland, Kiriromのように第2次大戦後のポストコロニアル状況下で建設されたものばかりではない. 植民地期において, 植民地ではない主権国家の中にも同様の高原保養地は建設されていった. 中国の廬山, 莫干山, 鶏公山などはこの典型であろう. ヒルステーション研究の端緒となったSpencer and Thomas (1948)は曖昧な部分を残しながら, 日本, 中国における高原保養地を広範にヒルステーションとして扱っている. 廬山をはじめとする中国, あるいは雲仙, 軽井沢, 野尻湖, 草津など日本の高原保養地がヒルステーションとみなされる理由は主として気候学的な要

因による. Spencer and Thomas (1948)は, 南アジアから中国, 南日本に至る沿岸部では, 夏季の気温は西欧人が通常の生活を営むことが出来る限度を上回り, 避暑の必然性が生じると主張する. 西欧人の避暑空間として, 標高にともなう冷涼な気候条件を利用して建設される高原保養地がヒルステーションとみなされ, その結果, 情報収集の限界もあってきわめて雑多な高原保養地, 山間部の景勝地がヒルステーションとして指摘されることになった.

確かに廬山 (羅, 2005), 莫干山 (李, 2011), 鶏公山は欧米の宣教師によって見いだされ, 上海, 南京などからの西欧人避暑客によって形成された高原保養地である (臧・十代田・渡辺, 1998; 潘, 2009). 軽井沢, 雲仙にも上海からの避暑客が訪れていた (村松, 1998; 上田, 2009). 軽井沢, 野尻湖なども宣教師主導で開発された避暑地であり, その主たる選択理由が夏季の気候条件であったことは明白であろう. とはいえSpencer and Thomas (1948)は, ヒルステーションに対する植民地主義の影響をほとんど無視している. 廬山をはじめとする中国における高原保養地の成立は, 1880年代から20世紀初頭における清朝末期にあたる. 欧米列強の進出で極端に弱体化していたとはいえ, 行政権はかろうじて維持されており, それゆえに欧米諸国, 日本の進出は租借, 租界というかたちをとらざるを得なかった.

前述の地域においても, 最終的に租界の契約が結ばれることはあっても, 土地利用権の収用は対価を支払う買収というかたちで進められ, 永久租借という地権を基盤にした実効的な支配, 占有が行われたに過ぎない⁴⁾. 廬山では牯嶺公司と呼ばれる開発組織が設立され, 大英執事会という宣教師を主体する意志決定機構が開発, 運営を担うこととなった. 道路建設など基盤施設の整備, 警察権の行使なども牯嶺公司が行い, 中国側の主権は著しく侵害された. しかしこれらの高原保養地の運営は別荘 (別荘) 用敷地の分譲益, 別荘所有者の負担金, 来訪者からの収入によってまかなわれた事業活動であり, 民族主義の高まりばかりでなく, 事業活動としての行き詰まりによって租界型の高原保養地運営は, 植民地主義の終焉を待たず

に終息することとなった。中国における戦前の高原保養地は、英国統治下のインドなどにおけるヒルステーションより、むしろ現在の第三世界における多国籍リゾート開発企業による大規模開発との共通性が指摘されよう。

日本においても、西欧人主体の避暑地建設にもなって、軽井沢では地元事業者への圧迫などが生じている（上田，2009）。半面雲仙における上海などからの避暑客受け入れは、地元を巻き込んだ国家政策として日本の主体性の下に行われていた。これらの事例を考えると、主権国家における高原保養地建設は、英国統治下のインド、ビルマ、マラヤ、あるいは仏領インドシナにおけるヒルステーション建設と、無限定的に同一視できるものではない（稲垣，2009）。

他方、第2次世界大戦終結後に建設されるGenting HighlandあるいはKiriromをヒルステーションと規定するためには、植民地主義とポストコロニアル状況の強い連続性を想定せざるを得ない。しかしこれらの高原保養地の建設にあたって利用されたのは、植民地期に形成されたヒルステーションのイメージであり、気候条件を利用しようとする着想に過ぎない。広い意味では植民地主義の影響下に置かれているとはいえ、これら高原保養地建設の主体はかつて植民化されていた国家であり、気候条件の利用も植民者の身体的必然性、あるいはライフスタイル維持の必然性に根ざしたものではない。むしろ植民地主義の終焉とともに生じた、ヒルステーションの国民化の文脈のひとつとして理解されるべきであろう。

IV 擬似ヒルステーションの概念規定

ヒルステーションに関する議論を特定の研究意図の下に明確化するためには、これらの類似性を持つ高原保養地を、一旦別の範疇として規定することが有効であろう。白坂は植民地政策とは無関係に西欧人主導で成立した高原保養地の存在を指摘し、それを「quasi-hill stations」として類型化することを提案している（白坂，2009）。ここでは白坂の着想を拡張し定式化することで、西欧的景観を特徴とする非西欧世界における高原保養地

のある部分を、操作的に一つの類型として独立させることを試みる（稲垣，2010）。

白坂は類型化の詳細について述べてはいない。しかしこの種の高原保養地の例として軽井沢をあげていることからしても、主権国家における西欧的景観を特徴とする高原保養地を念頭に置いたものであることは確かであろう。これを受けて、気候条件を基盤に成立する西欧的景観を特徴とする高原保養地のうち、植民地主義と直接関係を持たないものを擬似ヒルステーションとして類型化することにしよう。この類型化に従えば、前述のGenting Highland, Kiriromなどの第2次大戦以降に開発の始まった地域も、廬山、莫干山、鶏公山など清朝末の中国に成立した地域も、雲仙、軽井沢、野尻湖などの地域も擬似ヒルステーションとして分類されることになる。

擬似ヒルステーションはかならずしも一体ではない。廬山あるいは軽井沢に代表される植民地期に植民地以外の主権国家内に建設された高原保養地と、Genting Highlandをはじめとして第2次大戦以降新興の国民国家において開発された高原保養地に大きく区分することが出来る。また開発の経緯も、前者の大半は宣教師による避暑という私的な目的を端緒とするのに対し、後者は多様である。Genting Highland, Kiriromは開発主体こそ民間資本、国家という違いがあるものの、当初から国家政策に組み込まれた公的開発の色彩が強い。一方稲垣（2010）がヒルステーションに類似する地域としてあげた北タイのPaiは、当初は西欧人のヒッピーコミュニティとして成立したが（Cohen, 2008）、タイの経済成長にともなう国内観光の急速な発展を受けて、涼しさあるいは高原の風情を主たる資源とするタイ人を対象とする観光地に変貌している（稲垣，2010）。Paiはきわめて周辺的な擬似ヒルステーションながら自然発生的な事例として位置づけることが出来よう。

擬似ヒルステーションをヒルステーションに類縁の存在として規定する根拠の一つは標高にともなう気候条件の利用である。廬山、莫干山、鶏公山などの中国における事例、軽井沢、野尻湖などの日本の事例を見ても、擬似ヒルステーションが標高にともなう冷涼な気候条件を利用する避暑の

場として機能したことは疑いがない。一方 **Genting Highland** の標高は最高点で 1,800 m に達し、十分標高にともなう冷涼な気候を利用する条件を満たしている。しかし冷涼な気候条件は避暑のための主要な要因として利用されたというより、**Cameron Highland**, **Fraser's Hill** など植民地時代に建設された主要なヒルステーションとのイメージ上の接続を作り出すため、あるいは雲に閉ざされた山頂として沿岸部と異化するための要素として用いられたと考えて良い。

Pai における気候条件はさらに記号的な色彩をおびている。**Pai** の標高は 500 m 足らずで、平野部に比べ相対的な涼しさに過ぎない。しかし急速に拡大するタイの国内観光市場は「針葉樹、冷涼な気候という自然条件を（中略）、大衆的なオクシデンタリズムを基盤にファッションブルに転化させていく、高原状の風景の中に洋館が建てられ、その光景を眺めながらコーヒーを楽しむ、セーター、マフラー、上着を着用することで冷涼な気候を意図して消費するなどの傾向が生じ、西欧的景観、ファッションブルなレジャー行動が再生産されることとなった」（稲垣，2010）。**Pai** における気候条件は、直接利用されたわけではなく、一旦記号に転化した上で商品化されていった。植民地に建設されたヒルステーションにとって、冷涼な気候条件は高温、湿潤な沿岸植民都市との関係上、避暑として必然的な重要性を持っていたのに対し、疑似ヒルステーションにおける気候条件の利用はより広範な広がりを持っている。

ヒルステーションのもう一つの特徴である西欧的な景観に関して、疑似ヒルステーションは一定の方向性を持っている。開発当初から大量の観光客受入を目的とし、収容力確保のために大規模建築を必要とした **Genting Highland** などを例外として、ほとんどの疑似ヒルステーションでは西欧的、すくなくとも非土着的な景観が形成されていった。廬山に代表される中国の疑似ヒルステーションでは、当初宣教師によって建設された西欧風の別荘⁵⁾、教会建築は現在でも主要な観光資源であり、展示施設ことに別荘は宿泊施設としても利用されている。

一方 **Kirirom** は 1955 年以降の人民社会主義共同

体政権下におけるカンボジア近代化、ことに都市開発と都市基盤整備の流れの中で建設された。人民社会主義共同体政権下の公的な開発の多くは、現在 **New Khmer Architecture**（**Grant Ross and Collins**, 2003）と総称される建築様式を特徴としている。これは一種のモダニズム運動であり、用途、地域によって若干の相違はあるものの、インターナショナル・スタイルを気候にあわせて改変し、若干の伝統的な意匠と組み合わせたと見えよう。首都プノンペン、ことに公共建築は伝統的な意匠の比重が大きく、シハヌークヴィルなどの保養地的性格を持つ地域では、純粋なインターナショナル・スタイルが大勢を占めていた（**Molyvann**, 2003）⁶⁾。この中で **Kirirom** の性格は際立っている。公務員の休暇用宿舎、外国公賓用宿舎、人民社会主義共同体の成果を展示する展示館などの公共施設は伝統的な意匠を全く用いないインターナショナル・スタイルである半面、戸建ての別荘はむしろ西欧的なヴァナキュラリズムに支えられた山小屋風の意匠が用いられていた⁷⁾。これは人民社会主義共同体政権下の建築運動とは大きく異なる方向性であり、ヒルステーション建設という意識の下で、ヴァナキュラーな西欧的景観への志向が生じることを伺わせる。

V 疑似ヒルステーションの国民化

ヒルステーションの多くは植民地主義の終焉にともない、国民化の過程に置かれることになる。疑似ヒルステーションも類似の過程に置かれた。疑似ヒルステーションの国民化、つまり「自国民による取り戻し行為」は大きく二つの位相を持っている。第一は主権国家における疑似ヒルステーションの国民化である。日本、中国における疑似ヒルステーションでは、かなり早い時期から国民化が始まっている。廬山（牯嶺地区）の警察権は 1927 年に返還され、租借契約も 1936 年、完全に解除されて、中華民国による回収が実現する。それに先立つ 1933 年から国民政府は廬山を夏の首都と定め、南京から行政機能が一部移転し始める。回収の結果、生じたのは中国人避暑人口の増加である。1917 年には 1,647 名であった避暑人口（居

留人口)は1931年には2,716名に増加しており、このうち中国人は0名から1,243名に増加している(臧・十代田・渡辺, 1998)。この間、西欧人の減少をおぎなうかたちで、中国人の避暑が急増したことが明らかである。ヒルステーション、擬似ヒルステーションを問わず国民化の一つの形態は、地域を支える人口が自国民へと大きく変化することである。日本における事例も近似している。野尻湖は、軽井沢の避暑の主体が日本人に移行するにつれ、物価上昇などを忌避した西欧人が移住して形成されたという(上田, 2007)。

一方で国民化の進行は高原保養地としての性格を大きく変化させる訳ではない。1933年以降の南京国民政府による「夏の首都」としての廬山は、政治・行政的には中国化を進めながら、従来からの西欧的別荘が政治、外交の場として活用された。これは中華人民共和国成立後もそのまま引き継がれる。廬山は党・政府要人の避暑に用いられる特別な場所となり政策決定の場、外交の場として用いられた。1903年英国人によって建設され、後年蒋介石夫人の宋美齡に送られた英国式の別荘・美廬は、国民党政権下で重要な政治的舞台となり、共産党政権下でも毛沢東の廬山滞り時の宿舎として用いられている。この様に擬似ヒルステーションにおける国民化は、西欧的表象に対する漠然とした、同時に二律背反的なあこがれを前提として、具体的な西欧人の存在あるいは影響を排除するかたちで進行したとみなして良からう。

第二の国民化の位相は、戦後に形成された擬似ヒルステーションで典型的に見られる。擬似ヒルステーションの開発自体が、国民化の過程そのものであったと言えよう。高原保養地の開発は、かつて植民者のライフスタイルであったヒルステーションにおける避暑生活を、擬似的とはいえ自国民のために組織的に開発する行為であった。Paiにおける事例は、この点きわめて示唆に富んでいる。Paiはエスニックツーリズムの中心地として知られたMae Hong Sonに至る中継点であり、前述の通り1980年代から自然発生的に奥地志向あるいは、暗黙にドラッグツーリズムを求めるバックパッカーによって一種のヒッピーコミュニティが形成されていった。しかし西欧人主導のコミュ

ニティ形成とは言え、ゲストハウスは地元民家の転用、あるいはごく簡単な茅葺きのコテージでヒルステーション的景観とは大きく異なっていた。

むしろPaiがヒルステーションの相貌を帯び始めるのは、2003年にタクシン政権下で麻薬撲滅運動が開始され、経済成長ともなあってタイの国内観光が急成長を始めた2000年代後半に入ってからである。2006年には入り込み観光客の75%以上がタイ国内旅行者にかわり、ヒッピーコミュニティが作り出した「タイの中のスイス」という標語は、むしろタイ人観光客に対して意味を持ち始める。この流れの中で洋風の建物が増加しはじめ、擬似的西欧空間の形成が進んでいく。Cohenはこの時点でもバックパッカーの役割を重視しており、バックパッカーに依存する小規模ゲストハウスなどの所有者とそうでない住民間の対立関係が生じたと報告しているが(Cohen, 2008)、コミュニティ構成員が利益を共有しうるナイトバザール(Walking Street)が導入された時点で、タイ国内観光重視の方向性と相容れないバックパッカーをはじめとする西欧人観光客に対する暗黙の締め出しは基本的方向になったと考えて良い⁸⁾。これはPaiがタイヤイ(シャン)による村落共同体から、タイヤイを中心に移住山地民、チェンマイから50年代に移住して生きたホー(回教徒)などを含む地域コミュニティとして再編成されるきっかけとなった(Inagaki, 2011)。同時に西欧的景観の形成が、実質的な西欧人への締め付けと同時並行的に進行したことは、前述の擬似ヒルステーションにおける国民化の過程と照らし合わせて、きわめて興味深い。

VI ヒルステーション概念の再検討

本稿では気象条件を基盤に成立し、西欧的景観を特徴とする高原保養地の中から、操作的に擬似ヒルステーションを概念規定し抽出することを試みた。その結果として残余項として、植民地主義の下で形成されたヒルステーションが残ることになる。擬似ヒルステーションとヒルステーションとの相違はどこに存在するのであろうか。ヒルステーション研究の視座を意識しながら、最後にま

とめておくことにしよう。

相違点は次の3つの視点で捉えることができる。第一は植民地主義とポストコロニアリズムとの関係であろう。たとえ第2次大戦後に建設が始まった擬似ヒルステーションといえど、植民地主義の下で成立したヒルステーションのイメージを利用する以上、植民地主義との関係から自由であるとは言い難い。しかしこれらの擬似ヒルステーションにとって、利用したのは西欧の景観であり、避暑という余暇行為に過ぎず、植民地主義との関係は多くの場合、観念的であったと言える。

これに対して植民地主義下で成立したヒルステーションは西欧の景観を特徴としながらも二面性を持っていた。西欧的な町並みと、そこにおける西欧人の生活は、実際のところ植民化された人々によって支えられており、西欧的な景観と、それと同時に成立する土着的な町並みの二重性はヒルステーションでごく一般的に見ることが出来る特徴である。ヒルステーションにおけるポストコロニアル状況は、この二重性の解釈を必然的に含まざるを得ず、常にリアルな植民地主義を追体験することを迫られる。この点、意図して西欧の景観のみを成立させた擬似ヒルステーションに対し、ポストコロニアル状況はより複雑な様相を呈することになる。

第二の視点は、ヒルステーションの社会的な役割に関連している。植民地主義の下で成立したヒルステーションは政策的に見れば、植民地を維持するために必須の装置であり(稲垣, 2009)、同時に植民者から見れば高温多湿の沿岸植民都市の生活から身を守り、西欧人としてのアイデンティティを守るかけがえのない場として意識されていた。ヒルステーションの多くがサナトリウムをはじめとする療養施設を早くから設置したのは、こうした事情によっている。また多くのヒルステーションでは針葉樹や果樹の植樹など自然の改変が行われ、温帯の野菜栽培も一般に行われるようになっていく。擬似ヒルステーションではこうした例はほとんど見ることが出来ない。擬似ヒルステーションが余暇という生活の一部を観念的に成立させたのに対し、植民地主義の下で成立した

ヒルステーションは食生活など身体性に関連した部分をも含む、より全体性を持った運動であったと言えることが出来よう。

第三の論点は、ヒルステーションをめぐる主体の問題である。擬似ヒルステーションは成立の当初から、それがかつて植民化されていたか否かに関わらず、主体は新興国の国民であり、西欧的景観という観念化された客体がそれと対応するという構造を持つ。しかし植民地主義下で成立したヒルステーションの主客構造はより複雑である。かつての植民者はポストコロニアル状況下においても、歴史や記憶を語るというかたちで主体であり続けており、同時に新しく主体となった新興国の国民から見れば、かつての植民者もまた客体として捉えられるという、主客の二重構造が成立している。これら二つの主体が、コロニアルヘリテージとしての西欧的景観をめぐって相互反映的な交渉を行うことが、現在ヒルステーションが置かれているポストコロニアル状況であろう。これは擬似ヒルステーションの主客構造をはるかに超えた複雑性を持っている。以上の3点はヒルステーションを分析する上での基本的な視座と考えて良からう。

前述の通り、もとより擬似ヒルステーションは実態概念ではない。しかし一旦ヒルステーションの周縁領域に擬似ヒルステーションという中間項を仮構すると、ヒルステーションの持つポストコロニアルな性格を前述のように、明確に規定することが出来る。これは分析上、擬似ヒルステーションという概念を導入する大きな利点であると考えられる。

謝 辞

本稿は科学研究費補助金・基盤研究(C)「グローバル観光の原初的形態としてのヒルステーションに関する総合的研究」(課題番号23614023・研究代表者・稲垣勉)による調査をもとにしていく。記して感謝にかえたい。

岩田修二先生からは、ご造詣の深いパキスタンにおけるヒルステーションについてのご教示を得た。植民地時代に形成されたヒルステーションは

現在のインドーパキスタン国境を越える関係を持っていた。ヒマチャル・プラディシュ州（インド）の一部のヒルステーションは現在パキスタンに属するラホールを母都市としていたし、インド所在の植民地軍の一部は夏季にパキスタン領内のヒルステーションに駐留するなどの事例が見られる。現在の国境を前提とした研究では、この地域におけるヒルステーションの実態を明らかにすることは難しい。しかしご教示にもかかわらず、残念ながらパキスタンにおけるヒルステーション調査は進んでいない。今後ともご指導をおおぎながら、パキスタン領内のヒルステーションに関する研究を進めていきたいと願っている。

注

- 1) Kirirom という名称は比較的新しい。1944年の国王行幸に際して、同地域はクメール語で「喜びの山」を意味する Kirirom と命名された。その後、大臣を歴任し人民社会主義共同体政権下で Kirirom の建設に功績のあった Tioulong にちなんで1967年に Tioulongville と改称されたが、現在では再び Kirirom という名称が使われている。
- 2) キリロム国立公園内、ビジターセンターにおける説明による。
- 3) Grant Ross and Collins (2006) 所収の1963年の定礎式についての報道では、Kirirom における都市の建設はヒルステーション (Station d'Altitude) の創出であると記述されている。
- 4) 李はヒルステーションという概念を用いてはいない。しかし Spencer and Thomas (1948) を引用して、「避暑地」が植民政策の結果として南アジアに生じ、その後東南アジアを経て中国、日本へと伝播したと論じる。一方、莫干山ではアヘン戦争以降の国力衰退にともなって、租借、租界による非法（不法）な支配が行われたと指摘している（李，2011）。
- 5) 1927年当時、英国、アメリカなど15カ国の建築様式による560棟に及ぶ別荘が存在した（方，2006）。廬山のインターネット紹介サイト・中国廬山旅游网〈www.lushan.org.cn〉によれば、中国式259棟、アメリカ式185棟、英国式125棟、ドイツ式17棟、ベルギー式12棟、日本式11棟、フランス式7棟、フィンランド式3棟、ノルウェー式3棟など16カ国の建築様式による別荘が現存し、その一部は宿泊施設に転用されインターネット経由での予約が可能である。
- 6) 本稿ではフランス語版を参照した。
- 7) Kirirom では1970年に破壊が始まり、1972年にクメール・ルージュの支配下に入った。その後、民主カンブチア（クメール・ルージュ政権）時代を経て、1992年

に至るまでクメール・ルージュによって実効支配された。この間に全ての建物が破壊され、ほぼ建築物は現存していない。実質的に高原保養地として機能した時期はきわめて短く、現存する写真も少ない。本稿の記述に際しては、National Archives of Cambodia 所収の写真を参照した。

- 8) 現在 Pai では区の囑託職員が夜間 Walking Street の巡視を行っている。目的は市に全域に施行されている禁酒、禁煙条例の履行だが、タイ人観光客にはこの条例違反はほとんど無いことから、西欧人観光客ことにバックパッカーの実質的な規制を狙っていることは明白である。

参考文献

Cohen, Erik, "Pai: A Backpacker Enclave in Transition", in Cohen, Erik, *Explorations in Thai Tourism*, Emerald 2008 pp. 105-134
 方方 2006, 『到廬山看老別墅』人民文学出版社
 Grant Ross, Helen and Darryl Leon Collins 2006, *Building Cambodia: 'New Khmer Architecture' 1953-1970*, The Key Publisher
 稲垣勉 2009, 「ヒルステーションの概念規定に関する一考察—ヒルステーションの現象学的側面に関するノート—」, 稲垣勉, 杜国慶編『暮らしと観光—地域からの視座—』立教大学観光研究所 pp. 95-102
 稲垣勉 2010, 「擬似的ヒルステーションとポストコロニアル状況—北タイの事例から」, 『グローバル化の中のリゾート地域に関する総合的研究—植民地期から現代まで—』立教大学観光学部 pp. 1-9
 Inagaki, Tsutomu 2011, "Understanding the Making of Multi-cultural Communities: An Example from Hill Society in Northern Thailand", *Proceedings of International Symposium on "Thailand-Japan Cooperation in the Era of Multicultural Society"*, Institute of East Asian Studies, Thammasat University
 King, Anthony D. 1976, *Colonial Urban Development: Cultures, Social Power and Environment*, Routledge & Kegan Paul
 李南 2011, 『莫干山—一个近代避暑地的兴起』同济大学出版社
 罗时叙 2005, 『廬山別墅大观』中国建筑工业出版社
 Mogenet, Luc 2003, *Kampot Miroir du Cambodge, Promenade Historique, Touristique et Littéraire*, Librairie You-Feng
 Molyvann, Vann 2003, *Modern Khmer Cities*, Editions Reyum (Molyvann, Vann 2006, *Les Cités Kuméres Modernes*, Editions Reyum)
 村松伸 1998, 『図説上海—モダン都市の150年』河出書房新社
 潘丹 2009, 『中国近代避暑地の成立と変遷』立教大学大学院博士論文
 Reed, Robert R. 1979, "The Colonial Genesis of Hill Stations: The Genting Exception", *Geographical Review*, 69 (4)

pp. 463-468

Robinson, G. W. S. 1972, "The Recreation Geography of South Asia", *Geographical Review*, 62 (4) pp. 561-572

白坂蕃 2009, 「マレーシア, カメロン・ハイランドにおける hill station の形成と蔬菜栽培の発展」, 『立教大学観光学部紀要』 11 pp. 5-24

Spencer, J. E. and W. L. Thomas 1948, "The Hill Stations and the Summer Resorts of the Orient", *Geographical Review*, 38 (4) pp. 637-651

上田卓爾 2009, 「第二次世界大戦以前の日本のリゾート(外人避暑地)について」, 『名古屋外国語大学現代国際学部紀要』 5 pp. 89-127

臧理, 十代田朗, 渡辺貴介 1998, 「租界時代の上海からの避暑地としての廬山の成立過程」, 『日本造園学会研究発表論文集』 61 (3) pp. 643-646



稲垣：擬似ヒルステーションの概念規定と国民化の様態



写真1 マフラーをして葉書を書くPaiの観光客。Paiを訪れる観光客の多くが、夕刻以降は上着、セーター、マフラーなどを着用する。もっとも気温の下がる乾期には手袋をした観光客もめずらしくない。これらは「寒さ」を記号的に消費する手段といえよう。



写真2 Paiを見渡す高台に立てられた洋館。国道1095線沿いの高台の喫茶店に併設するかたちで、バンコク資本によって建設された。観光客にとってPaiらしい雰囲気の立ち寄り場所、記念撮影のポイントとして人気がある。



写真3 擬似西欧的な景観を意識してデザインされたカシコン銀行（泰華農民銀行）Pai支店。こうした銀行はブティックバンクと呼ばれ、カシコン銀行はNan（北タイ）など新しい観光地での展開を計画したが、現在のところ他地域での展開は順調に進んでいない。



写真4 Kirirom山頂のChalet d'Etat（国家シャレー）の煙突遺構。Kiriromにとって最も重要な建築物であったが、1970年に破壊され、現在では暖炉とその上部の煙突部分および地下室だけが残されている。



写真5 Chalet d'Etatの地下部分。Kiriromの建築物は他の人民社会主義共同体統治下の建物と異なり木造が主体であった。このため現存する部分はごくわずかで、Chalet d'Etatもコンクリートもしくは石造りの地下部分、煙突のみがかろうじて現存し、それ以外は失われている。地域全体でも現像する遺構はきわめて少数である。